

2012年10月27日(土)

第2回 谷川流『涼宮ハルヒ』を生んだ
西宮の風景

- 西宮の風景は世界的にファンの多い『涼宮ハルヒ』を生んだ。
西宮ゆかりの新しい文学として、谷川流の小説について語る —

講師：作家・文芸レクチャー／土居 豊

※ 講座終了後、「西宮まちたび博 SOS 団 in 西宮に集合よ！(10/27～11/11 ACTA 西宮内
入場自由)」を講師とともに見学します(希望者のみ)。

3. ハルヒのモデルとは？

『涼宮ハルヒ』は、谷川流が高校時代の先輩のことをモデルにして書いた、という趣旨の、『消失』のあとがきがある。

※引用

《高校時代、僕は一瞬だけ文芸部に所属していた。メインの部活動が他にあったので足を向けるのは一週間に一度もあればいいほうだったが、もともと週一でしか開いていなかった。部員が一学年上の女子生徒一人だけだったからである。僕が初めて門を叩いたとき、眼鏡をかけた理知的な顔つきの彼女が唯一の部員で部長で先輩だった。その先輩と当時の僕が何を話したのか、何か話すことがあったのか、全然覚えていない。(中略) その先輩の名前を思い出すことができない。きっと先輩も僕の名前を覚えていない。だけどあの時そこに誰かがいたことは彼女も覚えているんじゃないかと思う。僕がそうであるように。》

(谷川流『涼宮ハルヒの消失』あとがき 角川スニーカー文庫)

- 1) 北高時代の知人からみた当時の谷川流氏について
- 2) 谷川流氏の震災体験について
- 3) ハルヒの名前の由来について
- 4) 当時の北高の校風について

4. 谷川流作品のモデルについて

- 1) 現実の北高文芸部と『ハルヒ』のSOS団との共通点と相違点
- 2) 珈琲屋ドリームについて
- 3) 西北駅前広場について

5. 谷川流自身による谷川流作品

- 1) 『涼宮ハルヒ』シリーズあとがきにみる谷川氏のエピソード

『涼宮ハルヒの溜息』あとがきによると、近所のコンビニが閉店してしまい、もよりのコンビニまで徒歩15分かかるようになったのが困ることや、コンビニまでの途中の池に渡り鳥がいることなどが語られている。

『涼宮ハルヒの暴走』あとがきによると、ゲームはあまりやらない、とのことだ。

『涼宮ハルヒの動揺』あとがきによると、アメフトは好きでよくみている、ということだ。これは、アメフトの盛んな関西学院大出身ならではといえよう。

『涼宮ハルヒの陰謀』あとがきによると、初夏がすきで、蛙とセミの音がすきだという。夏は夜中のコンビニに行きやすい季節だということもあるらしい。

『涼宮ハルヒの憤慨』あとがきによると、家の押し入れにしまっている段ボール一箱いっぱい、昔読んだ本が詰まっていて、その影響は様々に大きいという。寒がり、前世は猫だろうともいう。アイデアのメモは、パソコンのデータに入れてあるが、なかなか探し出せないのが困り者だとか。タイトルにはいつも苦勞する。たとえば、「彷徨える影」というタイトルを思いつき、そのままではなく、一度英訳して、「ワンダリングシャドウ」というタイトルにしたのだとか。『涼宮ハルヒの憂鬱』というタイトルは、あまり考えずに決めた、という。

2) その他の作品のあとがきにみる谷川氏のエピソード

『閉じられた世界』あとがきによると、何年かまえ、田んぼと山しか見えない風光明媚な土地に住んでいた、とのこと。

『電撃！！イージス5』あとがきによると、隣の市の図書館にバイクで行くのだそうだ。学生時代のバイト仲間とのつきあいについても書いてある。

3) 谷川氏の談話

『涼宮ハルヒの憂鬱』でデビューした当時のインタビューより

※引用

《(前段省略)

Q：以前は会社勤めをしていたということですが、どんなお仕事をしていたのですか？

谷川：婦人服のチェーン店で、店長もときめきたいことをしていました。ぜんぜんたいしたことしていないんですけどね。

Q：会社勤めをしながら、いろいろ書きためてたんですね。

谷川：特に「書きため」はしていなかったですけど、「考えだめ」はしていました。寝付きが悪いので、夜寝るときに考えるんです、なんかこんな話みたいなのを。

Q：時間もできたところで何かちゃんと書いてみようかと。

谷川：そうですね。でも、もともと何か書きたかったというのは昔からありました。高校時代にも何か書いていた気がします。友達とかには見せていたかな。評判？ 散々たるものだった気がするんだけどなあ。だいたいちゃんと話が終わってなかったような。

Q：その当時はどんなジャンルを書いていたのですか？

谷川：そのときも学園モノでした。どこか学園モノにノスタルジーがあるんですね。

(学校生活が)こんなだったらよかったのになあみたいな。(後段略)》

(ザ・スニーカー 2003年6月号スニーカー大賞大賞受賞者 谷川流インタビュー)

このインタビューにみられる谷川流の小説観は、まさに、拙著『ハルキとハルヒ』で述べた、失われた故郷へのノスタルジーそのものである。過ぎ去った学園生活へのノスタルジーが執筆動機になっていることを、素直に語っているのが、非常に興味深い。

1. 阪神間文学としてのハルヒを論じる～実際に描かれた風景

1) 作品舞台のフィールドワークについて～聖地巡礼とは？

近年、ニュースにとりあげられることも多い聖地巡礼という行為は、アニメ作品を対象にしていることが多い。実はその先駆的な例は、文学作品の舞台や作者の故郷を探訪することにみられる。もっとも有名な例は、『シャーロック・ホームズ』の愛読者であるシャーロキアンたちであろう。また、日本における『赤毛のアン』の愛読者たちも、アンの聖地・プリンス・エドワード島への旅行をするような点では、同じだといえる。欧米では、『ハリー・ポッター』ファンのポッターリアンというのが、近年よく知られている。日本のアニメを対象にした聖地巡礼は、海外のアニメファンの中にも、増えてきているようだ。その聖地巡礼の代表的なものが、『涼宮ハルヒ』シリーズのライトノベルと、そのアニメ版なのである。

2) 『涼宮ハルヒ』シリーズと西宮の地名

ライトノベルの谷川流『涼宮ハルヒ』シリーズには、西宮の地名の記述は出てこない。ただ、祝川（夙川）、光陽園駅（甲陽園）や、北口駅（西宮北口駅）といったネーミングは、関西在住の人間には、西宮市のこと？ と思わせるし、5万人収容の野球場（甲子園？）、鶴屋山（甲山？）など、作中の風景は、阪神間を彷彿とさせる。ハルヒの聖地巡礼を、何か所かやってみたことがある。ひとつの仮説をもっているのだが、『ハルヒ』のSOS団が集まる喫茶店のモデルは、最初は珈琲屋ドリームではなく、マルコ・ポーロだったのではないかと考えている。なぜなら、『ハルヒ』の中で描かれる喫茶店は、駅前のロータリーに面しているはずだからだ。マルコ・ポーロというのは、まさしく西北駅前ロータリーに面したカフェバー的な店で、当時、西北駅前の待ち合わせなどによく利用されていた。夜はワインバーになるため、アニメ版のドリームとはイメージがまったく違うが、学生当時の谷川流が、ドリームと同じく、マルコ・ポーロを愛用していたとしても不思議ではない。なにしろ、谷川流は地元の関学生だったのだ。

2. 作品の本当のモデルは？

1) 【ハルヒの出身について】

「東中学出身、涼宮ハルヒ」の本当の出身は西宮市立大社中学校？

2) 【甲山について】

鶴屋山は甲山？

3) 【図書館のモデルについて】

谷川氏のよく行っていた図書館は？

4) 【ロケ場所についての真偽】

阪急沿線と阪神沿線が入り混じっていて、作品中の距離感は疑問。